

# 水俣で感じたこと

福井市 宮川 和也

日時：2014年6月27日（金）～29日（日）

## 1 自然に包まれる感覚

水俣調査を終えて、強く印象に残っているのは、その圧倒的な自然の存在感でした。杉本水産で見た雨の水俣湾。天の製茶園に向かう道のり、どこまでも続いているかに見えた緑の山々。そして、あさひ荘と頭石村で、常に聞こえていた川の水音。梅雨時の肌にまとわりつく湿気。自然が、強い存在感を持って我々を包み込むとともに、時には猛威を振るうであろうことを予感させる凄みも漂わせていました。

「ここに住んでいる人々は、この圧倒的な自然を謙虚に受け入れ、ギリギリの対話を重ねながら、生活の糧を得ているのだ。」そう思いました。

決して楽ではないはずの、自然とのやり取りを毎日繰り返しながら、杉本さんも、天野さんも、勝目さんも、しっかりと自分の「生きる道」を見出しており、その姿には充実感と誇りがみなぎって、まぶしく見えました。

私は、自分の地元の自然と、水俣の自然を比べながら、いつの間にか「ないもの探し」をしていました。しかし、そのくらい、水俣の自然と、そこに住む人々に魅了されたのです。

## 2 一人ひとりから始まる

水俣調査で出会った人々（杉本さん、天野さん、勝目さん、笹原さんなど）は、一人ひとりが水俣というまちの将来を考えながら生き、それぞれがつながり合うことで、水俣全体に良い影響を与えていました。「たった一人の市民」が、地元学を通して水俣の魅力を再発見し、水俣に「あるもの」同士をつなげ、水俣を活性化させていったのです。私は、自治体職員としてというより、一人の人間として、「よく生きる」ための参考がここにあると感じていました。もちろん、そこに吉本先生、松木さん、富吉さんなど、自治体の職員の皆さんが効果的に関わっているわけですが、お一人おひとりが、人間として真摯な関わり方をしていることの方が大切だと思いました。

## 3 自分を見失わないこと

天の製茶園で「利き紅茶」を体験する機会がありました。その際、天野浩さんが、「生き残るためには、紅茶の個性を大切に、信念を曲げないことが大切」「利き紅茶のときは、紅茶の癖や個性が出るように淹れるんです」とおっしゃっていたのが、記憶に残っています。そういえば、杉本さんも、頭石村の勝目さんも、水俣中央商店街の方々も、足元にあるものをしっかりと見つめて、その個性を生かそうとしており、自分を見失ってはいませんでした。そして、その水俣の個性の価値を

高め、誇りを持ってしっかりと発信している姿がとても頼もしく感じられました。

#### 4 人が集まる場所

週末学校の参加者が夕食をごちそうになった、天の製茶園の「いろり小屋」は、天野さんが18年程前に、廃材を使ってご自身で建てたとのこと。三つのいろりとトイレがあり、大人数が訪れてもゲストルームとして使える、居心地の良い空間でした。天野浩さんは、いろりを囲んで、楽しい仲間と美味しいものを食べたとき、「水俣に生まれて良かったな」と感じるとおっしゃっていました。

「自治」とは、突き詰めれば、自分でできることは自分ですること。一人でできないことは、みんなと相談して助け合うこと。そう考えたとき、自作の「いろり小屋」に、仲間が集う風景は、まさに「自治」の象徴なのだと思えてきました。

#### 5 地元に戻って

水俣に居る間、心の中で地元と比べながら、密かに「ないもの探し」をしていた私でしたが、「いったい、地元のことをどれくらい知っているのだ」と改めて思います。水俣に生きる皆さんは、精一杯水俣と向き合い、水俣を再発見し、「ここで踏ん張る」と覚悟を決めた方々ばかりでした。私もそんな気持ちで自分の地元を根を張れたら…と思っています。